

全国自問教育の会



EOSA Education of Self-Asking

発行日：2013（平成25）年3月1日 No.4

発行者：全国自問教育の会（会長：小島信由）

編集：自問教育の会事務局（斉藤 丸山 白澤 吉川 片岡）

事務局：長野県飯田市龍江 9205 飯田市立竜東中学校内 斉藤辰幸

連絡先：TEL 0265-27-3169 FAX 0265-27-4729

URL：http://jimon.3zoku.com/

問い合わせ先：http://jimon.3zoku.com/php/sformmail.html

第21回 全国自問教育の会の報告

テーマ『確かな学力と豊かな心の育成 ～深まりのある教科・道徳の授業の創造～』

本年度の全国自問教育の会は、石川県野々市市立野々市中学校での開催でした。野々市中学校では道徳的实践活動である「自問清掃」を通して、生徒の「道徳性」をそだてようと研究を深めてきています。1日目は、『平成24年度 いしかわ道徳教育推進事業「人と地域を生かした道徳教育講座』と兼ねての開催でした。まず、清掃活動の参観でした。その後、自問ノートを活用した道徳の授業を、各学年2クラス、計6つの授業を提案していただきました。2日目は、『自問教育の会「実践交流会』を行いました。



2日目は、6本の実践レポートが集まり、全国各地で積み重ねてきている実践に学び合う機会となりました。

○道徳公開授業

～自問ノートを活用した道徳授業～

1年4組・6組『殿さまのちゃわん』他に学ぶ姿勢2-(5)

2年1組・2組『軽いやさしさ』あたたかい人間愛2-(2)

3年1組・4組『てんびんばかり』 勤労の尊さ4-(5)

○開会行事

・開会挨拶 野々市市教育委員会 教育長 堂坂 雅光

・会長挨拶 自問教育の会 会長 小島 信由

○授業整理会

○研究発表

・会場校挨拶 野々市中学校 校長 橋口 有康

・研究発表 野々市中学校 教諭 中島 卓二

・講評 自問教育の会 理事 平田 治

○情報交換会 【金沢エクセルホテル東急】



2日目

全国自問教育の会「実践交流会」

レポート発表と自由討議の形式で、6本の実践発表から学び合う機会となりました。発表された実践レポートの概要を紹介します。どの実践レポートも学ぶべきところがあり、参会者からの意見や質問などで、交流会自体も充実したものとなりました。



1「『自問清掃』の発想原理と構造

－概念図(試案)による検討－

自問教育の会理事 平田 治

著書「学校掃除と教師成長」より、発想原理と方法的原則について話していただいた。考案者竹内隆夫先生の記述をもとに論証を試みた結果、「時実脳生理学」「井島美学」「民主主義における自由と平等の解釈」「禅の思想」「ペスタロッチの思想」の5つが発想原理であることが明らかになった。

「自問清掃」は5段階の実践的道德学習教材として構築されたのであるが、そこには竹内先生が美術科指導方法として考案した「条件型学習」の方法的原則が強く影響していた。

今後はそれぞれの実践者が、この5段階の構造をどのような概念図で表すかを検討し合うことが必要であろう。現段階における平田試案(概念図)が提起されたので、これを参考にしてほしい。

2「自問教育に取り組んで」

福岡県八女市立岡山小学校 牛島真奈美

岡山小学校では学校として自問清掃に取り組んでいる。岡山小では教師のとして①掃除時間には、教師自身ががまん玉をしっかりみがく。おしゃべりをしていても、掃除をさぼっていても、「指示や命令」を控える。決して叱らない。②教師自身もおしゃべりしない。③教師も自分の掃除をする。④子どもの掃除態度や掃除の仕方を比べない。⑤子どもを一定の方向に誘導する目的をもってほめない。子どもの掃除に感動

したら、素直に感動を語る。⑥自問ノート等を積極的に活用し、子どもに語り、子どもの成長を見つめていく。⑦他の教育活動においても自発性を大切にする。⑧自問集会を計画し、子ども自身が自らを振り返る場を積極的に設ける。⑨必要な指導があれば、掃除終了後に行う。

6年生の子どもと向き合いながら、自分の間違っていたことを子どもの前で謝りやり直していかうとする教師の姿を率直に語られた。

3「自問教育をこれからも継続させるために」

石川県白山市立光野中学校 石田浩幸

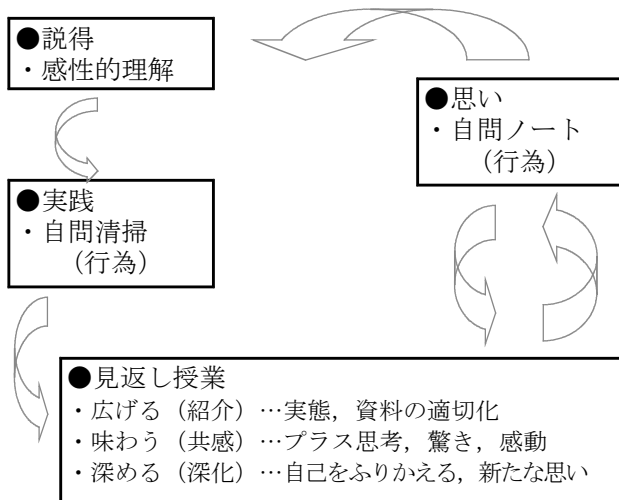
2007年に自問清掃を全校で開始し、集団授業放棄、教師への〇〇、喫煙等の実態が大きく変容し改善していった。2012年の現状として、規律の低下、無気力などの少々問題が出始めている。また、教員も異動により自問教育の良さを語れる人が少なくなった。また、自問ノートにコメントを書くことに苦痛を訴える声上がる。生徒が無言で清掃に取り組む姿から、指導に気を緩めている教師の姿。

これらの課題を解決していくために、まず、組織を改革していった。教員の問題については、自問だよりの発行、自問を振り返る授業の実施、意思力をためず場面設定、自問集会、掲示による啓発などを行ってきている。教員の異動による継続性の難しさをどのように克服するのかという課題に向き合ってきている事例発表であった。

4「説得の授業提案」

東京都大田区立矢口西小学校 渡辺恵輔

2011年の自問教育の会における鎌倉先生の提案された自問清掃構想図



教師の関わりとして、説得（語り）を全体にしていく場面がある。教師の視点から子どもの視点への転換をするための説得の場面。

- ・「語りの授業」から「考える授業」へ
- ・「心情的なアプローチ」から「科学的なアプローチ」へ
- ・「説得」から「納得」へ

という視点で、説得の場面を実際の資料を提示しながら模擬授業の形の提案であった。

5「『自問清掃』石の上にも三年」

石川県能美市立福岡小学校 室和彦

能美市立福岡小学校に校長として赴任した室先生が3年間にわたり自問清掃に取り組んできた実践の成果を発表した。

県指定の研究発表会に向けて自問清掃の時間からかっこよく公開しようと思気込んだがとても恥ずかしくて見せられない状況に頭がカーッと熱くなり腹立たしくなった。ここで「自分は何のために自問清掃を導入したのか、学校そして自分の見栄のためではなく、一人一人の幸せを願ってのはずだ。」と気づいたところから、新たに遅々として地道な一步一步の歩みが始まっていた。

少しずつ変容を見せる自問ノートの内容。あの手この手の方策を考える教師。

- ・自問強化週間
- ・学級、学校、自問だより
- ・トイレ掃除に学ぶ会
- ・校長のプレゼンによる自問集会や出前授業
- ・道徳の時間における題材の研究
- ・冬休みの宿題として大掃除を自問清掃にする…親子自問清掃の取り組みもはじめ、PTAの理解と協力も深まり、自問清掃が学校全体に浸透していった。卒業文集に自問清掃のことを書く子どもが増え、他校にも波及していく状況になっている。

6「これって自問ですか？」

長野県松本市立会田中学校 丸山博

機会があるごとに職員会議で「よろしかったら自問活動に取り組んでみませんか」と遠慮がちに提案してきたが、議論になることもなく月日だけが過ぎ去っていった。本年度、急遽来年度から学校として、自問清掃に取り組むこととなり、自問清掃がスタートし始めている。まず、自問清掃にあまり関心のない先生方に迷惑をかけないように、推進の大半を自分がやることにして進めてきている。

2階のオープンスペースに集まって簡単な説話や自問ノートの紹介などをしてからスタートするようにしてきた。

Aさんの自問ノートに記述に対するコメントをどのように書いていくか、演習を行った。



実践交流会の感想

- 初めて参加しました。いろいろと勉強になりました。ありがとうございました。テーマを最初に掲げて議論をするのもよいかと思いました。その場の流れでいくのもまたよいところがあるのですが…（石川県小学校教諭）
- 本当にすばらしい会でした。それぞれの発表、お話の中にたくさんできっとさせられたことがありました。それによって、自分自身の実践を見つめ直すことができ、本当に有意義な時間でした。会場校では大変なご苦労だったと思います。湯茶の用意等もしていただきもてなしていただき本当に感謝です。（長野県中学校教諭）
- 全国規模での自問教育の広がりを感じた2日間でした。（長野県養護学校教諭）
- 自問清掃を始めて2年目、昨年度は、成果があったようにそのときは思っていたが、今振り返ってみると表面的かつ形だけを求めていたということがわかり「～のフリ」をしている子を育てていたことが今の原動力になっています。とても楽しい、そして来年度もまたご一緒させていただきたい！と強く思いました。大阪でもがんばります。2日間本当にありがとうございました。とても素晴らしい2日間でした。（大阪府小学校教諭）
- 自問清掃に取り組んでいる全国の方々とはふれあえたことが一番ありがたいことで、同じようなことで悩んでいると共感したり、その方の取り組みにはっとさせられたり、勉強することばかりでした。それらすべてが押しつけがましいことではなく、素直に入り込んでいけると思いました。遠く離れたこの地に来てよかったと思います。（福岡県小学校教諭）
- 今年は鎌倉先生や関先生、山本さんのお話などが聞けなかったのが少し寂しかったです。光野中の様子を聞いて、また、丸山先生のお話など苦労が伝わってきました。野々市の清掃の様子、一見バラバラに動いているようで、でも自問している姿があったように感じました。県外視察ができ、いろいろ刺激がありました。（長野県小学校教諭）
- 教育活動の本質を目指しながら、取り組んで

おられることがより深く感じることができました。成果（子どもにとって）はすぐに現れるものではないと思いますが、将来必ず振り返ることができるのではないかと思います。

（石川県中学校教諭）

- 今回お話を聴かせていただいて自分ももっと「自問清掃」に取り組みたいですと思いました。正直、今まで、うまく自問できていませんでした。生徒もしゃべったり、さぼったり…そういう状況でついつい「しゃべるな！」と声を出してしまいます。今度、そういう場面に会ったら、少し落ち着かせてイライラがおさまるまで座って待ってみようと思います。（石川県中学校教諭）
- 本校の現状は教師が見ていれば、取り組んでいる（ように見える）が、見ていなければ取り組んでいないという生徒がまだまだ多いと感じる。ただ、2年間の自問清掃を通して、行動やノートに現れていないけれど、人間的に成長したなど感じられる部分もあり、これは自問の成果なのではないかと思います。他校の様々な実践を聴かせていただき、新たな気持ちで今後も取り組んでいきたいと思いました。（石川県中学校教諭）
- 自由な検討会形式でとってもよかったと思います。現場の悩み、本音が聞かれてよかったです。毎年毎年の同窓会的な雰囲気が出てよかったと思います。（石川県中学校教諭）
- 学校として組織的に自問清掃に取り組むにはどうしたらよいか。私は友人に誘われて、今回初めて参加しました。そこで感じたことは何事でも基本的なことは教師の情熱とそれに取り組む根幹があること。それは全ての学校教育での取り組みに共通していると思いました。自分が今後どうしていいか考えかえすよい機会をもらったと思います。大変勉強になりました。現場に戻ってこの研修会の中で学んだことを生かしていきたいと思っています。ありがとうございました。（石川県中学校教諭）
- この「自問清掃」に出会って半年になります。今回この自問教育の会に参会させていただいて改めて自分の不勉強といいますか、世間知らずを認識した次第です。やり方はいろいろ

あるというお話もあったように思いますが、それにしても私のやり方の不十分さがわかりました。正直なかなか自問への取り組み方が深まって行かない思いが毎日のように感じられ、それが自問清掃＝ストレスタイムとなっているわけですが、私のやり方を改善し実り多き自問になるようにがんばりたいと思いました。今日はそのエネルギーを沢山いただくことができました。ありがとうございました。具体的な実践とそれに関わる熱い討論。本当のためにになりました。(石川県中学校教諭)

- 自問清掃について考えるよい機会となりました。「正直清掃」…先生が見ている見えていない関係なく、裏表のないが行動できる。「感謝清掃」…この校舎で学ぶことに感謝する。友だちに感謝する。この程度ではだめなのかなと思いました。自問教育とは？これもまた機会があれば勉強したいです。(石川県中学校教諭)
- 自問の会で沢山の方からのお話や実践報告を聞かせていただき、勉強になりました。こんなにたくさんの方が、自問に取り組んでいること、そして、同じような悩みを持っていることに、驚いたり、安心したりしました。生徒が主体的に動けるようになるために、自問はやはり大切だと思いました。この後もいろいろな手立てを工夫して、取り組みたいと考えています。平田先生の言葉は重いです。でも励みになります。連携がうまく行われていてよかったと思います。でも時折、身内の会という見方をしてしまうこともあり、参加者名簿などを使って、一般参加者の声ももっと聴いていけばいいのではないのでしょうか。全国とタイトルがつくと、なかなか挙手できないものです。(石川県中学校教諭)

- 「正直」がゴールという基本を思い出せたことがまず大きな収穫でした。意思、情操、創造の力をどう伸ばそうかとばかり考えていましたが、最終到達地点を示さないでいても、それは子ども達に伝わらないなあと思いました。ただ、こういうおとを自分個人だけで考え取り組むのはできるのですが、組織全体で継続させることは難しいです。初めて参加させていただきました。熱い思いがたくさん伝わってきて、パワーをいただいた気がします。ありがとうございました。(石川県中学校教諭)
- 子どもが変わるには、自分が変わらなければ…ということに思いがたどり着いてしまいました。自問清掃を行う子どもの姿から私自身の足りないことがたくさん見えてきました。人として生きていく中で何を大切にしなければならぬか。子どもに何を伝えるのか。もう一度考え直してみたいと思いました。

(福岡県中学校教諭)

- 教育の本質に迫る本音の話がたくさんお聞きできてとても有意義でした。子どもをどんな姿にしたいかという思いをいつももっていることが大切だと思いました。フリーに話せる雰囲気は特によかったです。(石川県中学校教諭)
- 他校の実践を聴くことができよかったです。牛島先生の赤の色鉛筆であったり、しっかり休む事で周囲の様子をつかんだり次のSTEPに進むための準備につながることなど参考になりました。ありがとうございました。

(石川県中学校教諭)

「自問活動」の創始者 竹内隆夫先生を偲ぶ

2010年の2月。竹内隆夫先生が惜しまれつつこの世を去りました。竹内先生の偉大な業績を知る先生方も高齢になってきています。しかし、自問清掃の理念は脈々と受け継がれ、現在も多くの先生方により実践され続け全国にも広がりを見せています。前号に引き続き、竹内先生から直接ご指導を受けた鎌倉正之先生により長野県民新聞にて『信州教育を支えた人々』と題して、竹内隆夫先生が紹介された文章を紹介いたします。本会前会長の鎌倉正之先生より許可を得て、長野県民新聞より転載させていただいています。



竹内隆夫先生

竹内隆夫評伝 -下-

鎌倉 正之

先生という呼び名を捨てる

美術教育学会長野支部大会の時のことである。竹内先生は冒頭の会長挨拶でこう言った。「本日私たちは美術教育を探求するためにここに集まった。ここには年の大きい者もいるし若い者もいる。男性も女性もいる。指導主事を経験した者、現在指導主事をやっている者、教員に成り立ての者様々な人がいる。しかし、ここには先生はいない。美術を通して人間教育をしようと言う志をもった同好の士である。すべて研究学徒なのである。だから、協議の中で〇〇先生と呼ぶのは止めよう。〇〇さんと言おうではないか」皆困ったような顔をした。理屈はその通りである。しかし、先輩に向かって〇〇さんと果たして言えるであろうか？まずいことに本日の協議会の司会は私に決ってしまった。まだ30代の頃である。この会には指導主事経験者や現役の指導主事が数人いた。中には本庁で管理主事をしているN先生もいる。困った。司会は指名しなければならない。どうしても名前を呼ばなくてはならないのだ。背中に冷や汗をかきながら、管理主事をNさんと呼んだ。この生意気な若造めと思われるだろうな。後の懇親会で謝ろうと思った。だが、竹内先生を誰も「竹内さん」と呼べなかった。「だめだな」と彼は言った。「だんだんそういう風にしていきましょうや」と言葉を添えた。これは日本美術院の「芸術の自由研究を主とす。故に教師なし、先輩あり、教習なし、研究あり」に通ずるものであり、竹内先生の提唱する自問清掃もこの精神を受けていると考える。即ち清掃中は、教師も子供とともに自問清掃をする。決して、ほめたり、しかったり、くらべたりしてはならない。これは教師も子供と同じ位置に立ち、同じ人間として自らの心に問う掃除をすることである。つまり清掃中は教師であることを捨てるのである。思うに自問清掃が仲々教師に受け入れられない理由

はここにあるのではなからうか。教師は子供の前で先生であることを一時的に捨てるのが怖い、又はそんなことをしたら教師の権威が無くなってしまうと恐れるからではないだろうか。竹内先生は教師が先生という鎧を脱いだ時に本物の研究ができ、本物の心の教育ができると考えていたのだ。

授業について

竹内先生は昭和50年代、教科研究の全体講師として下伊那の小中学校を回られた。そこで3枚教案を盛んに提唱された。当時、長野県の研究授業の教案はひどく分厚いものであった。教材の趣旨から始まり、学習指導要領における位置づけ、地域の特色、全校生徒の実態と縁々と書かれ、やっと授業学級の実態となり、1人1人の実態へと及ぶ。「そもそも……かくかくしかじかで……本教材の教育的価値は、このとおりである」といった調子で数枚が費やされる。次に事前授業の様子が事細かに記述され、関係領域について関係学年の指導例が2～3例紹介される。「このようなことであるので、本学級の授業はこの点に留意して仕組んでゆく」これで数枚が費やされる。次に、本単元の全体の流れとその授業経過が縷々書かれ、2～3枚が使われる。そしてようやく本時案となる。本時案は申し訳程度に半ページくっついている。その後には資料として本時に関する教材研究が2～3枚つけられている。総計15～6枚、ページにして30ページにもなる。研究グループで連日夜中まで研究会を行い、分担して原稿を作るので、はじめに述べていることと終わりとははずいぶんズレが起きてくる。時間不足で調整が十分できない場合が多い。研究授業の後の授業研究会では、指導案への質問とズレの指摘で半分以上の時間が使われてしまう。作る方も読む方も大変だった。竹内先生はこうした風潮に対して厳しく批判した。「大事なことは、本時の指導案（本時案）である。前置きはいつでもよい。今、目の前にしている子供にとって欠けているものは何である

か、それを補うために教師はどのような工夫をして、どんな学力をつけさせるのか。本時の指導が分かるように詳しく書かなくてはならない。従って前置き部分は1枚、本時案は2枚、計3枚にするべきだ。力を入れるべきは指導案づくりではなくて本時の指導そのものである」又、こうも言われた。「教師はあれもこれもと欲張りすぎて、1時限の授業に取り込もうとする。結果、何を身につけようとした授業か分からないものになる。1時限にやることは一つに絞って全員の子供にそれが身につくようにするべきだ」「子供の自主性に任せるといいながら、ハイハイとやかましい授業が多い。それは一生懸命考えている子の邪魔をすることになる」「子供主体の授業と称して、はいずりまわって終わる授業の何と多いことか。教師は教える師。自信を持って教えることは当然だ。子供は教師のレベル以上は伸びることができないのだから、教師は日々研鑽してレベルアップを図らなければならない」

竹内先生は、師範授業を買って出た。専門の図工・美術はもちろんのこと全ての教科の授業に及んだ。算数の師範授業を紹介しよう。平均の意味を教え、平均値を求める場面である。まず先生は黒板に大きく凸凹の線を書く。「これは荒れた地面です。鋤でこれを耕します。土の高いところを削って低いところに移し、平らにならしていきます。平らに均すことが平均です。平均台の平均ではありません」平均＝平らならに均すと板書する。こうして新しく出てきた平均の意味を整理して子供たちの頭に入れてやる。絵と共にイメージとして子供たちは理解する。次に、積み木3個・4個・5個を縦に3列並べて棒グラフにしたもの(立体模型)を用意して「さて、これを平らに均してみよう」といって指名する。指名された子供は5個の方から1個を取り、3個の方に移す。「そうですね。これで平らになりました。何個ずつになりましたか?」「4個ずつです」「そうです。平らに均したら4個、ここが4個、ここも4個ですね。この4を平均値といいます」平均値＝平らに均した時の数と板書す

る。「3と4と5の平均値は4となります」「では、次に同じような考え方をして2と5と8の平均値を出してみましょう」と一般化を図る。竹内先生によると小学校1年生から6年生までの算数の教科書を調べてみると、このような新しい用語が140数カ所あるという。これらの言葉は普通の生活ではあまり使われない算数の独特の言葉である。子供たちはこの奇妙な言葉の意味が理解できず、140数カ所でつまづくことになる。先生がその都度、ていねいな説明をしてやりこのつまづきを乗り越えさせないと落ちこぼしを作ることになってしまう。教師は責任を持って全員に分かるように教えることこそ大事だと訴える。

条件型学習

竹内先生の功績は、図工・美術の学習で条件型学習を発明したことである。30年以上前になるが、ユネスコから日本の図工・美術教育を視察に来たことがある。その結果、「日本の子供たちの絵はたぶん技術的には世界1だろう。しかし、芸術とは言えない」と評価して帰った。美術教師は悩んだ。積極的に技術指導をすれば、レベルは高いが画一化した作品を生むことになる。それは、個性の伸長を図るべき美術教育の目的と矛盾する。そこで、子供の制作を見守り、励まし、賞賛するという消極的な指導へ傾いていった。すると作品の質は落ち、何でもありになってしまった。先生は何も教えてくれないから、子供は何が良くて何が悪いのか分からなくなってしまった。そこに登場したのが竹内式条件型学習だった。自由制作の場合は、あくまで自由なのだから先生の指導の入る余地はない。そこで、自由制作と自由制作の間に短時間のドリル学習(条件型学習)を挿入する。こうして、サンドイッチのように繋げて行って表現力の向上を図ろうとする。条件型学習においては先生が積極的に指導する。但しその指導の中心は、「表現の心の使い方」を指導するのであって、先生の好みに子供を引っ張ったり、先生の嗜好

を子供に押しつけることではない。昭和59年8月第33回日本美術教育学会静岡大会で「小学校高学年から中学生のものの見方、感じ方について」と題した講演を行った。「作品は生まれなかったが、人間が変わったという授業、そういう授業が一つはっきり位置づけられる必要がある。それが本当の授業ではないか。」「本当の授業というものは、子供の体を変えてやらねばならない。本当に美意識が使える子供の体に変えるなり、高めるなりするのが本当の授業である。従って子供を変えることを目的にした授業では、作品は未完成でも構わない。これは、あることに気づかせるために行った一つの行為であり、この資料を使って目が開かれればいい。そうすると、その次の表現活動が本物に変わってくる。そういう意味での学習単元は、作品作りの単元とは、全く別に考えて良さそうである」「積極的な指導というのとは、どうあるべきか、くだいていうと『今日は、こういう心の使い方で自分を使ってみました。だけれども、それは、ひとつの心の使い方であるに過ぎないんだ。自分の作品を作る時には捨てていいんだよ』-「今日は」と「ひとつの」という二つのことが、絶えず指導者にないと先生好みの方へ連れて行ってしまって、手を汚したことにも気づかないという不遜な教師になっていくおそれがある。それが育てるという意味で、その中にはこういう悲しさというか宿命を含んでいるのではないか」条件型学習は、このように深い美学的考察から出てきた方法であることを美術教師は肝に銘ずる必要がある。

自問清掃

竹内先生が生涯をかけて作り上げた自問清掃は、今も静かに野火のように全国へ広がっている。平成4年「自問活動のすすめ」(第一法規)は、読売教育賞を受賞した。翌年、受賞を記念して全国自問教育実践交流会が発足し、毎年開催され、20回目の今年(2019年)は下伊那の竜東中学校を会場に行われた。自問清掃は、竹内先生が中野市

立高社中学校で実践した掃除による心の教育である。これによって荒れた学校を見事に建て直したのだった。その後、改良を重ねてどの学校でも誰でもできるようにした。全国の実践校から「これによって子供が変わった」「学校が変わった」「いじめ・不登校がなくなった」という報告が相次いだ。しかし、本当に竹内先生の意を汲んで実践するのは並大抵のことではない。掃除がきちんとできればよい人間になる等という簡単なことではない。そこには絶えず、管理と放任の落とし穴が待っているのだ。よい人間になるために掃除時間中に休んでもよいという普通では考えられないような考え方である。清掃中、教師は「ほめない、しからない、くらべない」で、子供と共に自問清掃をする。そして、子供の自発性を信じて待つのである。育てるべきは、子供の意志力、創造力、情操、感謝の心、正直な心である。詳細は「魔法の掃除」(平田治著)を参照されたい。ともあれ、私は幸運にも、竹内先生が自問清掃の理論を確立しつつあった、ちょうどその時7年間指導を受けることができた。そしてついに子供が変わった。(実は私が変わったのだと思う)彼らは現在32歳になるが、どの子供も堂々と胸を張り、明るく前向きに生きている。私はついにメッキのはげない教育を見つけたのである。それ以後、私は学級経営も学校運営も自問教育で通した。

おわりに

竹内先生の思い出は尽きない。やがて、没後2年になるが、竹内先生への思いは強くなる一方である。竹内先生に出会えて良かったと思う。先生のご遺志を若い世代に伝えていこうと強く思っている。



広がる 自問教育のネットワーク

「自問清掃」への新たな機運が胎動し始めています。平田(自問教育の会理事)が今年度講演や勉強会などで出かけた機会を振り返ってみると、「自問清掃」への関心は確実に高まっています。大分県美保小学校へは初めて訪問しましたが、この学校では福岡県八女市岡山小学校への視察をした直後に取り組みを始めていました。その岡山小学校と忠見小学校では、



すでに3年目の充実した成果が生まれつつある姿を実見できました。また、佐賀県吉田中学校へも初めて伺いましたが、すでに実践していた武雄中学校から転任した陣内さんを中心に歩み始めています。吉田中は小規模校、武雄中は大規模校であり、それぞれの特色を活かした実践が展開されていくと思います。平田を交えて両校の合同懇親会も開かれました。このように、公開研究が開かれた石川県ばかりでなく、九州地区でも「自問清掃」を学校運営の中核にして取り組む学校が増えつつあります。今後は九州や石川県で、自問教育のネットワークづくりが進展していくはずです。このような状況に呼応するかのように、先日大阪で「自問清掃」の勉強会が開かれました。上述の陣内さんが、岡本さんを中心に取り組み始めた東大阪



市池島小学校を視察する日に合わせ、上本町にある教育会館「たかつ会館」で15名の参加者を数え開かれたのです。池島小学校長岡田先生を初めとする先生方、同校区の中学校、大阪市の小学校、摂津・神戸などの小学校の先生方、九州から陣内さん、それに長野から出向いた平田を加えての多彩な顔ぶれでした。これを機に定期的な勉強会を開いていこうと話し合いました。写真は、そのときの様子を写したものです。一方石川県では今ネットワークづくりに向けて、具体的に動き始めています。来年度はこのネットワークを土台にして、勉強会などが立ち上げられることが期待されます。

編集後記

石川県野々市市立野々市中学校の全面的な協力の中、第21回全国自問教育の会を盛会のうちに終えることができました。今回の自問教育の会には、石川県、長野県はもとより、千葉県、東京都、静岡県、愛知県、岐阜県、奈良県、大阪府、山口県、福岡県と日本各地より多くの先生方が集まりました。密度の濃い2日間の様子を少しでも感じ取っていただけたかと思います。

また、鎌倉先生の協力を得て、2号にわたって竹内隆夫評伝を掲載致しました。自問活動の理念が全国に広がりつつある今、考案された竹内先生の著述も多くの先生方が手に取る事ができる仕組みをいち早く作っていきたいと思っています。

今回も無事に会報を出すことができました。全国にネットワークが広がりを見せている自問活動。来年度は、長野県に会場を戻して松本市立会田中学校での開催を決定したところです。石川県の室先生のおっしゃった「子ども一人一人の幸せを願って…」という原点を共有する仲間として、自問活動を軸とした豊かな学校教育が全国各地で創造されていくことをお祈り申し上げます。(文責：片岡)